

記憶のある裡に
大正時代の或る子供の生活（上）

安渓 芙美子

登の歳えぎに一にをは
場小かた止書き三満八〇。これは、母の絶筆です。
し説ら原めきヶ八〇。つに生きて生きるだろうとす。
まします風七稿な始月〇。つに生きて生きるだろうとす。
すで歳をがめ前歳て、亡脳腫瘍のうとす。
（はままで安溪遊地）三らてので、亡脳腫瘍のうとす。
なく、思分四わ九なりのうとす。
（人いけ月れ九りのうとす。
物出てごて八またにうとす。
はで掲ろい年しめい。
すす載まく一たにう一〇。
べがしで記〇。一大〇。
て、まに憶月亡九方〇。
実いす書を二く九の歳
名つ。きつ一な九予ま
でも二終な日る年想で

二歳三ヶ月の記憶

人は一体幾歳位からの記憶を持つのだろうか。それは勿論人夫々に依るのは当然だろうが記憶の有る無しは思い出す反復の多少によるよう、私には思えてならない。

満一歳の位からの記憶を持つ人、或いは六、七歳以前の事は全く記憶にない人も、勿論いるはずだとずつと思い続けている。ところで私は大正八年七月生まれの老人だが、二歳三ヶ月の記憶が鮮明に残っている。

その部屋は可成り広く真ん中の布団の中に黒い口髭を持つ男の人が、胸の辺りにしつかり両手を組み目を閉じたまゝ眠っている。周りには白衣をつけ大きな眼鏡をかけた男の人と白い服の女性の一人は瓶を捧げ持ち今一人は寝ている男の人の胸に手を当てゝいる。

周りに三四人いる女の人は母、姉、叔母であるのは私にも解っていた。たゞ不思議なのは、三人共大粒の泪を滾しては拭き、またポロボロと涙が流れているのを、私は何とはなく変な気がした。この見知らぬ髭の小父チヤマはどうして目を開けないのかなあ、何時も私をだっこしてくれる姉や、"オバチヤマ"となつ

いている人も、お母さんまで泣いているのが、私は不思議でしかたがない。

「お姉さん、赤ちゃんの言葉をきいて」

叔母は涙いっぱいの目で私を睨むように覗める。姉が黒髪の小父さんに縋りつき、何か言つて泣くのを母親まで大粒の涙を流すのを、私はただ黙つて突つ立つたまま、一人喋りをした。

「モアカン、モアカン」といったのだそうだ。未だ言葉を話しきれない私の喋れる唯一の言葉が「モアカン」だったのだということは十歳を過ぎてから母から聞かされて、私は申し訳ない思いで泣いた。黒髪の男の人は実は父親で臨終の間際だったとの事だった。

私を抱っこして守りをしてくれた叔母は父の末の妹だということは、後年小学校に入学した折聞かされて、子供心にも何故「もうあかん」なんて言つたのだろうと可成りの間苦にしていたようと思う。

「モアカン」という赤ん坊の言葉は、大人にとつては「もうあかん、もういけない、もう駄目だ」であり詰り死を意味する言葉である。私は極く小さい頃に、多分十ヶ月位で歩き始め、同時に訳の解からぬ言葉を呴き、モア

カンもその無意味な言葉の一つであつたらしい。

然し死に臨んでいる人の回りをもうアカンといふ乍ら歩く事は、其処にいる者達には病人がもういけない、もうあかんというわけで死を意味すると思うのは当然だった。

立派な口髯をピンと跳ね上げたゞ眠り続ける人が、良くダッコしてくれた父だと理解するには私は稚な過ぎ、何時も喋り続けているアカチヤとかモアカンとかブベベ等の無意味語の仲間のモアカンを、父の臨終を取り巻く母や叔母兄姉や女中達にとつては、父の最後を意味するのは当然だつた。

私は女中の一人に抱き拘えられ泣き喚いて隣の部屋に寝かされワーワー泣き喚いたのが事だが勿論記憶にはない。それが私の唯一の父に関する記憶である。多分その後沢山の人たちの葬式や軍人であつた父の所属していた十六師団の聯隊の兵や上官達の訪問とか親戚縁者の葬儀の参加等人で一杯の我家の記憶は私には全くない。後年五歳年上の兄が、墨で髯を書き「僕は聯隊長でお前よりずっと偉いんだよ」とよく威張つたが「じゃ、私も聯隊長になる」と言つてみると兄はフンと小馬鹿にした笑顔になつて「お前は女の子だ。兵

士にはなれないよ」というのに腹立ち、私だつてきつと兵隊さんになるもんと心に決めていたが、すると目をしつかり閉じた父親のピンと跳ね上がる黒髪が見えたようにはい、多分抱かれた時その髪をひっぱった記憶が蘇るのだろう「お父さん」と呼んで了う。兄は哀れむような表情になり「馬鹿ダナー、もうとつくにお墓の中で骨だけしかないよ、これからは僕がお前のお父さんの代りになるんだよ」と墨で髪を描き、「どうだ、お父さんみたいだろ」と威張つてみせる。

「大分違うけど、まあいいよ、おにいちゃんのお父さんで我慢する」

「そうか、お前は聞き分けのいい偉い子だよ」賞められると何となく偉くなつたような気がして、『お兄チャン大好き』なんてお世辞の一つも言つて了う他愛なさ。

武道の達人の祖母の登場

そんな幾日か幾年か過ぎ我が家にも少し変化が起こる。それは母方の祖母が、娘の家の心許なさ、小学六年生を頭に小学三年生、四歳の幼児のいる家庭の監督に来てくれた事だつた。

ある日 庭の松の枝に腰掛けっていた兄がスルスルスイと来ると、陣取り遊びをしていた私の傍らに近づくと、囁くような声で私に言つた。

「芙子、お前知らないだろ、今日からお祖母さまが家の人になるんだよ」

「お祖母さまって誰？」

「お祖母さまってのはお母さんのお母さん、そしてこの人偉いんだヨ、武道の達人だつてサ」

「武道の達人つて何をする人？」

「馬鹿ダナーお前、ま、学校にも行かぬ年のお前にわからなくて当たり前だけど、武道つてのはね、僕が僕の友達と竹の棒でよくチヤンバラゴツコやつてるだろ、君だつて時々仲間に入つてお母さんに叱られるあれだよ」

「ふーん、でもタツジンつて、お祖母さまのお名前なの」

「馬鹿ダナー、お祖母さまをお前は知らないだろが毛利家の士の娘で、小さい頃に剣道を十分に習められたつて、お母さんに聞いたよ」

「????士の娘つて何する人？」

「お前に言つてもわからないだろが、誰より

も強い人の事さ」

「強い人つて怖い人の事？」

「ま、そんな人さ」

「そしたらもう泥棒やら来ても怖くないの？」

「ウン、お祖母さまは女でも剣道の達人だつてお母さんいわれたから、もう泥棒も押壳りも家に入らないよ」

「だつたらお兄チヤンも用心棒しなくてもいゝの」

「あゝ、泥棒入つても心配ないし、すると多吉も自分の家に帰れるよ」

多吉というのは女、子供ばかりの家を案じて、祖母の寄越した出入りの八百屋の丁稚さんで、まだ十代の男の子で、兄や姉の送り迎えや母の使い走りや、私のお話相手もしてくれる、私には優しいお兄チヤンの一人だつた。

「多吉チヤン家に帰つて了うの芙チヤンいやすあ、お婆さまより多吉ちゃんの方がいゝ」

「馬鹿ダナー、この間お母さんが押売りに攻められて難儀したこと忘れたのか？」 多吉チヤンお廻りさん呼んでくれただけじやないか」

「でもお婆さまつて、多吉チヤンみたいに私をオンドブして下さるの？」

「そりやまあ無理だけど、押売りだとか泥棒が入つても、お婆さまは毛利の殿様に仕えた家老の末娘で、剣道の達人だよ」

「達人つても、私にわからないもん！」

「とも角、年とついていても泥棒でも強盗でも武道とか柔術、剣道とかできる偉いお婆さまだから心配いらないんだよ」

でも私にはどうもこの兄の云うこと、芯から信用を出来ないでいる。兄にはおやつを巻き上げられたり、玩具を壊されたりすることもあるので、どうも信用できないでいる。兄は余り信用できないとしても、十歳も年上の姉なら、きっと本当の事を教えてくれるだろう。

「お姉さん、もうじきお婆さまが山口からお出でになるってお兄ちゃん云うけど、そのお婆さまって、剣道が出来てお兄ちゃんなんか、絶対勝てないって本当なの？」

姉は暫く考える風に、頬杖ついていたが思い出したように、「そうね、剣道の事は知らないけど武道つていってね、美チヤンにはまだわからぬでしようが、とても強い力で泥棒の腕ナシ力すぐに捩じ上げて降参させられるんですつてよ」

「お姉さん見たことあるの？」

「見ていないけどお母さんがそう仰言るのだからあなたも安心しなさい、お母さんは嘘おつしやらないでしょ」

姉にそう云われると何と無く納得出来て、一日も早くそのお婆さまがお出になればいゝと思つた。

翌日の昼頃お婆さまは少し年寄つたお爺さんを供にして我家に来られた。

「そなたが末っ子のフーサンかい？」

「私末っ子じやないの、私フーザンって名前です」

「おゝ、そうかいの、幾つにお成りかね」

「きつと五つか六つくらいです」

「そうかいの、自分の年位はもつとしつかり覚えるものじや、秀子はいつたい何をしているのじや」

「？？？」

いくらか叱責氣味に聞こえる祖母の語調は私には少し恐ろしく感じられた。

「母上様、ようこそお越し下さいました。有難うございます」

何時の間にか私の後に立つ母の声に振り向いた私は、何がなし緊張しているような母の顔を仰ぎ見て思わず『わい』と着物の裾に

縋りついだ。

「この子は人見知りをするようじやの、よい習慣ではないのう」

「多吉に暇を出してからこの子は遊んでくれる者がいないもので、つい失礼致しました。ふうちやん、お婆さまですよ。いい子ですね、こんにちはの御挨拶しなさい」

「ハイ、お婆さまこんにちは」

「こんにちは、だけではいけんのじや、自分の名前を先に云い、それからお婆さまようこそお越しなされませ、とこういうのじや、おわかりか」

間髪を許さないいくらか叱責の響きのある祖母の言葉にビクッとした私は、昨夜姉に幾度も教えられた言葉を思い出し坐り直して両手をつき、改めて挨拶をいう。

「お祖母さま、遠い処をようこそお出で下さいまして、有難うございます。私は末娘の英美子でございます。これから色々お行儀のこと教えて下さいませ」

「お立派に挨拶できたのう。秀子さん。この娘は父を亡くしても私の思うた程、しを垂れもせず元気そうでそなたも苦労じやつたのう。これからは私も子供の成長に手を貸

す 程 に し っ か り な さ れ よ」

母 は ウ ッ ス ラ と 泪 を 泛 ベ 祖 母 を 見 上 げ
「母 上 様 、 何 卒 こ れ か ら い く へ も お 導 き 下
さ い」

と い ふ な が ら も 一 生 懸 命 涙 が 滚 れ な い よ う に
し て い た 。

何 と な く 祖 母 を 見 上 げ 母 に 目 を 移 す と 母
の 頬 に 二 筋 の 涙 の 跡 が 見 え 私 は 思 わ ず 、 この
余 り 見 知 ら ぬ 祖 母 さ ん の 強 い 目 に 射 す く め
ら れ 、 思 わ ず

「お 祖 母 さ ん 、 お 母 さ ん を 苛 め な い で」

「お お そ う か い の う 、 そ な た は 母 を 大 事 に
す る 子 じ や の 、 そ れ は よ い 子 の 証 抱 じ や」

祖 母 は そ う い う と 私 の 頭 を 軽 く 撫 で た 。 私
は 何 と な く う れ し く て 、 昨 夜 姉 に 幾 度 も 教 わ
つ た 言 葉 を 思 い 出 し 乍 ら 二 度 目 の 挨 摺 を 述 べ
る 。

「お 婆 さ ん 今 は 姉 も 兄 も 学 校 に 行 つ て い ま
す の で 、 末 ツ 子 の 私 が お 祖 母 さ ん の お 手 伝 い
し ま す 。 何 で も お 言 付 け 下 さ い」

す る と ニ コ リ と も し な か つ た 祖 母 の 表 情 が 緩
み

「おおそなたが手伝つておくれかい、それでは手水の盥に水を汲んでおくれなされ」
子供なりに先は第一関門をやり過ごした
ような安堵感にホツとして、イソイソとポン
プを動かし水を運んで母を見上げ一寸微笑
んでみる。

母は私に小さなお盆に載る茶託をわたしな
がら

「滾さないようにお婆さまのお傍に持つてい
つて頂戴ね」

「ハイ」

返事はしたものの、どこに持つていけばいゝ
のか私にはわからない。お婆さまは白い幕の
垂れ下がる仏壇の前に坐り、併せた両手には
二重にも三重にも見える数珠を揉み上げる
ようには擦つておられる。

「お婆さま英チヤンお水を持つてきたの、何
処へ置くの？」

「おおそなたが手伝つておくれかい、それでは手水の盥に水を汲んでおくれなされ」
子供なりに先は第一関門をやり過ごした
ような安堵感にホツとして、イソイソとポン
プを動かし水を運んで母を見上げ一寸微笑
んでみる。

私は言われたようにソロリと降ろした心算
だが、何しろ可成り大量の水が入っているの
で、ソロリのつもりがバシヤンとなり金盥はひ
つくり返り水は廊下に零れ、大半は縁の外へ

流れで了つた。

祖母は振返りざま立ち上がり
「だから言わぬ事じやない、子供に持たせる
なんて論外じや」

「お婆さま御免なさい」

私は素早く祖母の前に坐り両手をつき頭を
下げて謝る。

「そなたは悪うはない。お光を呼んで来なさ
れ」

「はい」

私は言われるまゝ台所にいた女中のお光を
呼ぶ。

「お婆さまがお光を呼べと仰言つたよ」

滅多に使わない仰言つたなどと難しい言葉
がうまく口から出て少し得意である。といふ
のはその時家にいた

二人の女中さん、お光のお婆あとお兼婆あ
が二人とも

「嬢さんとお（その頃京都では女の子を嬢さんとお
と呼んでいた）どうおしゃした、お婆様にチ
ヤンと金盤お運びしたんでっしゃる」

「ウン、美チヤン置く時ガチヤンと水滾し
たの、そしたらお光を呼んできなされつて言

われた」

「へエさいどすか、そらえらいこつてすな、そ
やけど嬢さんの故やオヘン、お光が持つて行
つたらよろしうおしたのになあ、そんでお叱
られやしたんどすか」

「美チヤンには叱られたかどうかわからへん、
でもお光を呼びなされつていわれて美チヤン
こわかつた」

「そうどすか、そらびつくりおしやしたろ
な、もう大事おへん、外に遊びにおいでやす
お光があんじょうしますよつて、嬢さんもう
庭で遊んでおいでやす」

私は勿論ほとして庭へ出て、何処かの木の
上に兄がいる筈なので探すことにする。それ
にしてもあのお婆さまってこわいなと思う。
お兼のお婆のいう通り本当にお母さんのお母
さんのかしら？ 何でも教えてくれる兄に
早く本当のこと聞き度い。私は草履を履き兄
の居りそうな椋の樹の上を見上げる。案の定
兄はかなり高い枝に跨がり、木の実を口に抛
り込んでいる。

「お兄ちゃん、私も上に行きたい」
「よつしゃ、今迎えに行くゾ」

兄はスルスルと降りてくると私の下に廻り手早くお尻を持ち上げてこの枝その枝と私の持つ枝を指示しながら、押上げてくれるので瞬く間に私も樹上の人となりうれしくて耐らない。

「ね、お兄ちゃん、お婆さまって怖い人なの」「大したことないや、此処にいればいくらお婆さまだつて登れないから安心だよう。お前手が届かんから実は取るなよ、兄チャンが取つて渡してやるから一寸まつておれ」

「ウン」

兄はスルスル駆け登り瞬く間に手に一杯の実を採つて私のエプロンのポケットに入れてくれる艶やかに柔らかく甘い棕の実を頬張り何となく何時もの日に帰つたような一種の安らぎを感じた。

「ね、お兄チャン、お婆さまは何時まで此処にお泊りなの」

兄は少し考えていたが暫くするとニコツと微笑み

「きっと十日程だろう、十日程っていうのはね芙子、お前が十辺ほど寝れば過ぎるんだよ」

「そしたらすぐだネお兄チャン」

「そうだナーチ、芙子は昼寝するからまあ大

分長い間だろ

私は毎日一度や二度はお光のお婆あのお嘶を聞いていると眠ってしまう習慣がある。のでその間に帰られるかもしれないと思うと、少し安心のような、もつと居て欲しいような気がする。

「薰、薰や、そのような高い所へ妹を上げて、落ちては怪我するからもう下りなされ、そなたは年も上、男の子でもあるのじやから木登りは平気でも、美子はまだ五歳余りの女の子じゃ、危ないからもう降りてきなされ」

私はビクッとして兄を見上げる。

「お兄ちゃん降りなされってお祖母さまが言われたよ」

「わかってる、すぐ降りるからお前はそこ動くなよ、じつとしておれよ」

「だつてえ、お祖母様の言われることはちやんと守らないといけないって、お光のお婆あがいうたでしょ」

「わかつてる、だけど余り気にするな、僕は木登りの達人だ、落ちたりするものか。お前はそこから兄チヤンが教えたとおり出つ張りに足掛けて下に降りろ、そして暫く下で待つていろ、兄チヤンが一杯実を取つて持つていつ

てやるからな

「ウン」

私は素直に点頭うなづきソロソロと出ツ張りを指先で探し乍ら下へ降りる。縁側の陽の当る処に母と祖母が並んで坐りながらお兼婆の給仕でお茶を飲んでいるのを見下げ、お婆さまの横顔が母とよく似ているのでびっくりする。

「お母さんとお婆さま同じ顔に見える」

「馬鹿お言いでのない、親子じやから似るのは当たり前、六歳にもなつてそのような愚なことはいいなさるな」

「だつてえ」

「オーライ兄チャン笊降ろすからな君は小さくて重くて持てないからお光とお兼婆を呼んでお出で。そうさ、二つの笊に一杯あるんだ」

私は何とも面白くなつて台所にいた二人のお婆を大声で呼ぶ。

「お光とお兼のお婆早く来て、お兄チャン椋の実笊に一杯も採つたので降ろすから手伝いしてつてよ」

「へーエ、そりや偉いこつですがナ、落ちたら怪我するさかいすぐ行きまつせ」二人のお婆は大笊を持って木の下にやつて來た。

「僕二つとも紐で釣るすから二人でうまく受けくれよ」

「へエー、そやけど坊っちゃん一つづつゆつくり降ろしてくれやっしや」

「解つてるつて滾さんよううまく受取れよ」

「へエー大事オヘン、案定取りまっせ」
あんじょう

母も祖母もいつたい何事かという風に、奥の仏壇の間から出て来て木を見上げる。

「薰は何時もあのような危ない樹上りをするのかい」

祖母が聞くといつも嬢さん連れておあがりでつせ、とお兼婆がいらぬことをいう。

祖母は母を振り返り

「枝が折れゝば大騒動ぢや。秀子さんしつかり監督せにや大怪我の元になりますよ」

そんな祖母の話は私は何だかおかしい。

「だつてお兄ちゃんはお友達四五人と時は私も連れてこの東福寺の本堂の屋根の上でしょつ中鬼ごっこしてゐんだもん」

「秀子さん、芙美子はこんなこと言つてるが、
其方そちは知らぬのかえ」

「まあ、私は小学校にお勤めしていますも
の、静馬さんが亡くなつてから給料も入らな

いし、少佐つていつても遺族年金というか扶助料といふもんですか少ないものですから、お勤めでもしなくちゃ、女中もいることだし大変なの、あき子も暫くで女学校に入れなければなりませんから」

「そ、うだネ、女子の細腕では何かとやり繰りは大変じや、ババも多少のものは持つておるが病気でもすれば幾何いくばくかのものも必要じやしするから何とか遣り繰りすればやつていけようというもののじや、秀子、其方そなた二人も女中はいらん。私が来たからには一人帰しなされ。そうじやお光よりお兼の方がよう働くようじやから、お光はまだ若過ぎる、早速にも家に帰しなされよ」

「はい母上様がそうお思いならそのように致します」

(つづく)

記憶のある裡に

大正時代の或る子供の生活（中）

安渓 芙美子

前回のあらすじ。大正一〇年、二歳と三ヶ月で父をなくした芙美子は、兄の薰とともに、木に登つたりお寺の大屋根の上で鬼ごっこをするような暮らしをしていました。そこに、芙美子の母秀子の母であるヨネがやってきます。その人は毛利家の家老の娘で武道の達人でした。（芙美子の次男・安渓遊地）

祖母との日々

子供心にも二人の話す意味はすぐ理解でき、今度は若いお光が多吉のように家に帰されるとと思うと、悲しくなつて思わず泣いた。

「芙美子さんや、其方そなた何故泣くのじや。お

光は帰しても婆々がいるから心配はいらぬのじや。お光は若すぎて余り役立たぬ、五歳にもなればその位はわからねばいけん、士の子はそのくらいのことで泣いてはいけんのじや。私の傍においでなされ』

私は母を見上げどうしようかと戸惑う。

『お婆さまに逆らうことにはなりません。さ、傍に行きなさい』

母に促され私はしぶしぶ祖母の傍に寄る。

『そなたは父親に死なれても余り泣きもせず聞き分けのよい気丈な子じや、これからは婆々様が其方に武道を少し教え姉に優る子供に育てよう』

頭を撫でる祖母の手の暖かさで何となく気がほぐれたのだろう。私は暖かい祖母の手を両手で挟みお婆様を見上げ笑顔になつた。

『お、其方は人見知りをせぬ良い子じや、これからは婆々さまと寝ようぞ、おわかりか様芙チヤンにお話して下さい』

『よしよし、お話はいくらもしてとらせよう。だが自分のことをチヤンづけでいうてはならぬぞ、目上にものをいう時はもっと遙（へりくだ）つて、

私わたくしといわねばならぬ、おわかりか」

「ハイ、わかりました」

「よしよし、秀子やこの子は存外聞き分けがよい、もつとお転婆かと思うたが存外じや。私は自分が賞められているのは解ったが、祖母の言葉遣いが普通の女の人と違つて、何かしら大人の男の人が遣う言葉のように思えて、不思議だつた。

祖母が立去つたあと母に祖母の言葉遣いに就いて尋ねてみたがその訳はよく分かつた。

「祖母は毛利藩の士さむらいの娘で幼い時から家老の娘で上にも下にも男兄弟が居て、其頃の武家の習慣として剣道とか武道を幼い頃から習い、祖母はどの兄弟よりも熱心に習い兄や弟を凌ぐ力量にその父親に『この子が男ならどれ程安心かわからぬ』と嘆かせたとのことで、そのせいで今でも普通の男より強いのだから家うちみたいに女子供ばかりの家が気になつて来て下さつたの」

私の頭を撫で乍らの母の言葉に私はすっかり満足して、何かしら気分がホツとするのだった。というのは恰度ちょうどその頃あちこちの家に

良く泥棒が這入り子供心に、夜が不安だつたせいである。

「ね、お母さん、もし泥棒が家に来てもお祖母様がいらっしゃれば大丈夫なの」

「そうですよ、どんな男が這入つて来ても一度お婆様に掴まると身動きできなくなるから、美チヤン、今日からもう心配しないでお祖母様の傍で休みなさいよ」

母にそういうわれると子供心に感じていた一種の不安がすーと消えるのを覚える。

私は何となく嬉しくなつて、まだ棕の樹上にいる兄に母から聞いたことが伝え度くなり、祖母と母に一礼して外へ出た。

「おい芙公、何よろんでニコニコしてる」

「ね、お兄ちゃんもう降りて来て、いゝこと教えて上げるよ」

「フンお前のいゝことつて陣取り遊びだろ」

「違うよ、もつとずっとといいこと、お兄チヤンびっくりするいいこと、私うれしくつて、今日は一杯眠るんだからあ」

「ふん、寝ながら団子でも喰つたか、馬鹿な子じや」

「違うつてばあ、お兄ちゃんもお姉さんも腰抜かしてひっくり返る、いゝお話お母さんも

に聞いちゃったんだもん、教えてほしくないの

「お前の話なんてしれてらあ、せいぜいお母さんには浦島太郎のお話でも聞いたんだろ、そんなことなら俺の方が山程知ってるよ」

「違うつてばあ、もつともつと凄いこと、でももう教えて上げないよう、お姉さんだけに教えて上げるもーん」

「そりゃかい、勝手にしろ、姉さんなんて未だ未だ帰つてこないようだ、口惜しけりやもう一度登つてこい」

「いや、お婆様が六つの女の子は木登りするのはイケンつて仰言つたからもう登らないようだ」

「勝手にしろチンピラ。あ、面白いもの見つけたあ」

兄は私の気を引くように大枝の股に腰を降ろし手を翳して何かを見ている。それが私を引きつける兄の常套手段なの迅しくに承知している私は樹から離れて、又お婆様の傍に行く。

「薰はまだ木の上かい」

「はい」

「あのこは勉強しないのかね」

「夜お姉さんに教えてもらっているようです」「そうかい、お姉さんは女学校で忙しいのに

今皇后陛下にケンジヨウする絵を描いていらっしゃるつて、お光のお婆あが言つてました」

「そうかい、あれも絵が巧いのかね。秀子さん、つまりそなたの母親のことだがね、あれも昔から絵がうまかったのだよ。六条から府立第一高女へ通つている時も、毎日絵を描くのに追わされて遅く帰つたものじや」

こういう話になると私には余り解らない。それよりお祖母様は一体何処からお出でになつた人か、そして毎日何をしてこられたのか誰も教えてくれないのが子供心に何となくすつきりしない。自分で尋ねてみたいのだが「いらざることを聞くものでない」

と、祖母に叱られそうで黙つていた。その内お兄チヤンが教えてくれるだろう。

祖母持参のお菓子を貰つて口にすると今まで味わつたことのない不思議な少しねばつといお菓子。

「芙美子さんや、そうムチヤムチャと頬張つて食べるのは品が悪い、口を閉じゅつくり噛んで召しなされ」

早速祖母に注意され、「ハイ」と返事しながら祖母を見上げる。祖母は一枚のお菓子を小さく千切り一ひらすつ丁寧に口の中に入れ、音もさせず、静かにお茶と共に飲み込まれるようで、私はただぼんやり見上げるばかりである。

「美さんや、このお菓子はのう、松風というて御殿の方々のお召しになるお菓子じやぞよ」「？？？」

私は返事もせず、なんとなく歯の裏に粘りつくような味わいを鬱陶しく思い傍のお茶で流し込むと、

「お婆様御馳走様、美チヤンお兄ちゃん探してくる」といった。

「そうかい、薫は木から降りて何処へ行つたのかね」

「解りません、でもきっと緑葉谷でお魚釣りと思うけど」

「あれは勉強もせず木登りやら魚釣りなどにうつつを抜かしていて、頼りない物領じやの」

「母上様、あのこは父親が亡くなつてから学校へも余り行きたがらず一日中木登り川遊び時には倉から色々持ち出して、皆川へ捨

てゝくるので、お光もお兼も探し物に難儀しております。母上様少し折檻してくださいな

「左様か、もう其方の手に合わぬようになりましたか」

「はいどうしようもなく困り果てゝおります」

「お前さんの手に合わぬのじやな。よろしい、婆々が言うて聞かせよう。反抗しても私には勝てぬのじや。案じ召されるな」

「はい、母上様にお任せすれば学校へ行くやもしれませぬ。お願ひ申上げます」

祖母は返事もせず手にした煙管を勢い良く吐月峰に二三度叩きつけられた。私は何となく兄の身の上が不安になつた。

母や祖母の前から立ち上がり、兄が何処行つたか庭伝いに谷へ降り　"お兄ちゃん"　と大声で呼ぶ。

兄は可成り奥深い川上でパンツ一枚になつて川の中を右往左往していった。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん魚取れたの」と、呼びかける。

「あゝ、その馬穴バケツ覗いて見いよ。四匹も泳いでるよ」

私は何となく嬉しくなつて馬穴を覗く、本当

だ、大きなのが二匹、小さいのが二匹、皆元気よく泳いでいる。

「お兄ちゃん、沢山授ったね、でも逃がすのでしょ」

「馬鹿云え、焼いてお祖母さまにあげるよ」「いやだあ、お魚さんかわいそだよう」

私はもう泣声。何時も逃がしてやる兄が今日に限つて、どうして焼くなんていうのかわからない。

「せつかく泳いでるのに焼いちや可哀想だよう、お兄ちゃん逃がしてやつて」

「駄目だ、ほらもう二匹捕まえた。オイ 芙美公バケツ持つて来い」

私はバケツを掴むと持ち上げ、水無川の流れに全部流した。

「こらチビ、何するんじや」

兄は小川から飛び出すと私を思切り川へ突き飛ばす。私は前後不覚の怒りのため、耳も張り裂ける程の大声で泣き喚いた。

「うるさい、泣くな」兄も大声で喚く。

「嫌だー、お魚さん焼くのいやだ、せつかく泳いでたのにお兄ちゃんに掴まるのも可哀想なのに焼いて食べられたら、お魚さん死んじやうよう、イヤダーラー、イヤダーラー」

こうして一旦泣き喚くと、甲高い私の声は谷の奥から上の寺まで響き渡ってしまうのだった。見るうちに僧堂のお坊さんが四五人バラバラと川のほとりに降りてくる。

「こら小僧、ここで魚捕るなといつもいつてるだろ」

「捕つても逃がしてやるからいいのん違うの」

「そんじや何故妹が泣いてるのだ」

「そんなこと知るかい。此奴は何時も泣くんだよう」

「うそだ。和尚さんお兄ちゃん、いつもお兄ちゃんお魚さん逃がすのに今日は焼いてお祖母さまに上げるつていったの。だから美チヤンお魚さん逃がして上げた。そしたらお兄チヤン怒つたから美チヤン泣いたの」

「そうかそうか、そりやお兄チヤンが悪いぞ、この谷の魚は全部仏さまの生代りだよ、小僧、お前たゞ取つて面白がつてるだけで、いつも逃がしてたやないか」

「婆々様だつて、そんな人お前等の家に居つたことないゾ、坊さん騙すと地獄へ真っ逆様に落ちて鬼に喰われんだぞう」

「和尚さん知らんだけや、今日はうちに日本で一番強いお婆様が来てんだぞ」

「何、婆々様か。あの老師様知り合いのあの婆々様か。それにしてもこの通天橋の魚は絶対誰も食うことならんのだ。さあ、小僧解つたか、チビのいう方が正しいんだ、帰れ、その馬穴持つて上へいけ」

屈強の僧堂の坊さんに追い立てられやんちや盛りの兄もスゴスゴと馬穴を拘え上へ登り始める。

「芙チヤン、君のお蔭でお魚さん命拾いしたネ。さ、和尚さん抱ツ子して上へつれてあげよう」

私は何となくうれしくて、暖かい坊さんの胸に抱かれて上へ登った。

「ありがとうお兄ちゃんの坊さん」

「うん、芙ちやんはええ子だよ、元気だせよ」

小僧の和尚さんは、橋に登ると何度も頭を撫でて僧堂の裏門に消えていった。私は何となくその和尚さんがお父さんみたいなのだと納得してほつとしながら、母の待つ龍吟庵へ戻つた。

兄は祖母の前に膝を揃えて座り丁寧に頭を下げる

「遠い所をお越しになり、僕今日はお祖母様にお魚焼いて上げようと谷でお魚取つたの

に、芙子と僧堂の坊主が捨てて了いよつた」

「そ、うかい折角の骨折りが無駄になり、そなたは口惜しかろう。然し私は川魚は好かぬから、もう殺生は止めなされ」

兄は憮然とした表情で、いきなり祖母の前にある祖母のいう『松風』と名付けられたお菓子を驚掴みに四五枚取ると縁側から飛降りると

「秀坊ンチへ行つて来るう」と駆出して了つた。

「行儀の悪い小僧じや芙さんや、真似するでないよ」

「はい」

私は素直に云つて、兄が云う秀坊ンに会い度いなと思った。秀坊ンというのは東福寺からは少し遠い鳥羽街道の瓦屋の子供で兄の同級生で、何時も私に白雪姫とか赤頭巾とか珍しい外国のお伽噺をしてくれる、兄よりも好きな男の子だった。芙ちゃん秀坊ンのお話聞き度いなと心底思つたが、お祖母様の少し嶮しい嶮しい表情を恐れ、ものもいわず隠和おとなしく座つていた。

お祖母様は少し退屈されたのか、小声で聞

いたことのない歌を口誦されている。意味も節も全くわからないが、私は膝に両手を置き黙つて祖母の歌に聞き入る。何となく淋しいような悲しい気がしたが、祖母は年に合わない底力のある声で眼を閉じ自分の歌に聞き入っているような雰囲気はそれなりに感じとれて、終わるまで私は身動きもしなかつた。

「美さんや、其方は婆々様の唄をよう聞いておくれだね。これは今様という日本の昔の唄で、昔はこの唄と共に男も女も舞をしたものだよ」

祖母は軟らかな目になつて、私にはなんとなく祖母が私のわからない何かを思い出しているように感じられた。何時の間にか母もお光やお兼のお婆も聞いていて、夫々に手を叩いている。

「美さんや、お前さんも母者に唄を習うたであろう。婆々様に一度唄つておくれなされよ」

「さいやさいや。あの御隠居様うちの嬢さんは母御からいろいろ歌を習わされて上手に歌えて、それに合せて踊りも自分で作りでつせ

「そうちや、自分でね。それは是非共、婆々様にも歌つて踊つておくれなされよ。祖

母にそういうわれると気恥ずかしくもあり、でも歌わないと失礼になるような気もし、私は思わず後に坐っている母を振替り見た。

「芙チヤン、ほら此間自分で振り付けたあのリンゴの歌を踊りと一緒にお婆様に見て頂きなさい」

母にそう云われると黙つてていることが、この遠くからわざわざ出て来て下さった祖母に失礼なような気がして、恥ずかしさをこらえて歌つて躍ることにする。

当時、母は毎晩私を寝かせる折り、決つて『赤い鳥』という本を枕元に置き、歌を教えてくれたりお伽噺を聞かせてくれるのだつた。

「お祖母様、そしたら『赤いお家^{うち}』の歌と芙チヤン自分で作つた踊りと、一緒に踊ります」

「おおそろかえ、それは可愛らしいことじや」

祖母は優しい笑顔になつて手を叩いて下さつた。母もお光やお兼のお婆あも一緒になつて手を叩いてくれる。私は生まれて始めて恥ずかしいという気分を味わい乍ら、胸がドキドキした。多分それが私の晴れがましいとい

う経験の、最初であつたのだろう。

♪赤いお家の窓閉めて
林檎いとしや冬籠り
銀のお盆に載せられて
誰が忘れた棚の隅

お盆の上があの野なら
会うた小鳥も来るであろ
あの野で眺めた青空は
二度と帰らぬ夢の国♪

「お婆様これで終い」

「おおそとかえ、そなた上手に歌つて踊つ
ておくれだよ、可愛かったよ茉さんや」

怖いと思つていた祖母の思いがけない賞め
言葉にうれしくなつて、今度は姉に習つた難
しい女学生の唄を歌う。

夕空晴れて秋風吹き
月影落ちて鈴虫鳴く
思えば似たり故郷の空
あゝ我が父母いかに在わす

イフアボデイミタボディ、
カミングツルウザライ

とこれは姉の唄う英語の唄。

「そなたは却々利発な子じや、外国語も覚えて利発なことじや。サ、婆々様が褒美をとらせよう」

祖母は傍らの大きな袋の中から、紙で作つた姉様人形を出して掌の上に載せて下さる。私は嬉しくて大きな声で母に見せる。

「お母さん、ホラ芙チャンお婆様にこんなきれいなお人形さん貰つた」

母は手に取るとニッコリして祖母に向い、

「母上様何時までも御器用でうれしうござります」

「何の小さい子が珍しがつて喜ぶのが私のよろこびといいうものじや」

台所の婆あ婆も皆手に取つて、

「嬢さんきれいなお人形戴かれてよろしうおしたなか」

と喜んでくれるので、私は一層嬉しくなつて思わず、

「お祖母様有難うございます」

と、いつたことのない丁寧な言葉でお礼をい

う。

祖母は優しい目になつて私の頭を撫で
「其方は利発な子じや、今日はババサマと一緒に寝ようぞ。面白い話もして進ぜよう」と、いわれ、私としてはやつぱりお母さんと寝たいのだけれど、それではせつかく寝ようといつてくれた祖母に悪いと思ふ
「お婆様お話してネ」と言つてみる。

「何のお話でもして進ぜよう

「ヤーイ美子ばかりチヤホヤされていゝのう、僕だつてお婆様と一緒に寝るよう」

半分眠りかけていた兄が突然起きて

「お婆さん僕と寝ようよ

と、傍に寄ってきた。

「馬鹿お言いでのぞよ薰、そなたはこの家でただ一人の男であろうが。盗人の忍び込む時もあるうぞ。玄関の間でしつかり張番するものが男の勤めであることを忘れるでないぞ」

「そんなこといつも僕まだ子供だよう」

「もう子供ではありはせん。四年生といえば立派に男としての勤めは出来るのじや。それをまあそなたは木登りや魚取りをして僧堂の和尚に叱られたというではないか、亡くなつ

た父親の代りをせねばいけんのじや。おわかれかえ、もうそつと大人になりなされ」

「いやじや、僕まだ子供ダーリ。お父さんの代りなんて出来るはずないよう、僕婆々さん嫌いだーい、もう寝るわい」

兄はそういうと祖母に向かつて赤ンベーをして奥の部屋へ消える。

「母上様、何卒お許しを。あの子は腕白で困ります」

(つづく)

「何、よいよい。今に大人になるであろ、其方も大変であろうが頑張りなされや」

記憶のある裡に

大正時代の或る子供の生活（下）

安渓 芙美子

前回までのあらすじ。京都のお寺で暮らすお転婆な六歳の少女芙美子の家に毛利家の家老の娘で武道の達人である祖母がやつてきます。芙美子はきびしい中にも案外やさしい婆々様とともに寝るのですが・・・。安渓遊地の母の絶筆完結です。（安渓遊地）

日本一強い婆々様

何時の間にか婆や達も姉や母も部屋から消え私はお婆様と一人だけになり気が付くと布団の中だつた。それからどれほど時間が立つたのだろう。私はオシツコがしたくなり目覚めた。枕元には灯心の燃えるあんどん

の光で周囲が明るい、一人ではお便所に行けないので、何と無く目を開いて辺りをそれとなく見廻す。

すると何か動いている。あんどのんの光で見るともなく見ていると、影は見たことのない男の影である。私は恐ろしくなり、あれが泥棒という者ではないかと、とつさに思う。

「お婆様、お婆様泥棒がいる。芙チヤンこわい、お婆様おきて頂戴」

私は思わず、大きな声になつた。

「何じやチビとババアか」

男は私の傍によると頬を撫でる。

「お婆様いやだあ、泥棒が撫でたよう」

絶叫に近い子どもの声は一辺に家中を起こしたようだ。瞬く間に家中のあかりがつき母も姉も兄も私と祖母の部屋にやつて來たが、

「ヤーイ、泥棒がお婆様の膝の下で泡吹いてるよう」

兄の大声におどろいて隣に寝ている筈の祖母をみると、祖母は泥棒を押さえつけ、

「秀子さん丈夫な紐を持つてきなされ。身動きできないよう縛りつける程に」

と、ニコニコ笑っている。泥棒は苦しそうに

鳩尾みぞおち

「クソババアとガキだと思うたのに、なんちち
ゅうこつちや」

とぼやいている。

「タダのババと思うたがそちの失敗じや、ワ
シの武術で死ぬものを居るのぢや、ひと様の
ものを夜に盗もうとする悪党には当然の報い
ぢや、もう一発喰らわせてつかわそうか」

祖母が少し身動きすると、泥棒はペシャンコ
の姿になり、

「もう悪いことは致しまへん、へえ何卒堪
忍しつくれやす、ワシ息も出来まへん、もう
悪いことしまへん、へえ何卒堪忍しつくれや
す」

子どもの私が見ても一寸可愛想な程泥棒
は青い顔を畳にすりつけ、お腹を痛そうに
押さえつけ、涙を流している。

「其方ごとき悪者には容赦せぬが婆々の武
道じや。三人や五人が掛つて来ようともび
くともせぬのが毛利家の武道といふものじや。
まだ生かしてとらせただけ有難いと思わつし
やれ。婆々と子供と侮つたが其方の地獄じ
や。痛かろう。一度とこのような悪さをする

でないぞ。世の中には未だ未だ強い婆様が一杯おるぞよ」

「へえ、もう二度と悪さは致しまへん。けどこんな強い婆様に会うたは初めてじや」

「馬鹿いうな、我等年寄りは其方らと違い皆武道の心得があるのじや、性懲りものう悪さをすれば何れ其方の命はなくなるのじや。わかりたか」

「へえ、もう肝に命じてわかりました」

艶のある泥棒の額を祖母は二本の指でチヨイと押したが、彼は「痛々々」と大声と共に涙をポロポロ零し、子供心にも一寸この弱い泥棒が可愛想だった。

「オッチャン、お婆様の強いこと知らんかったの。お祖母様日本で一番強い人だつたのに、そんなとこへ泥棒に来たから罰当つたんや」

「さいでおます。さいでござります、へえ。こんな強い婆さまに会うたは始めてござります、へえ」

と、ヘコヘコ頭を下げていると、姉たちが呼びに行つたお巡りさんが三人も来て、

「こら正こう、又お前か。今度の懲役は長いぞ。ここのお隠居には一ころやろ。ざま見

る世の中なめとるから罰ばちじや」

正公といわれた泥棒は鼻水をすすり乍ら、
「へえ強い御隠居様、もう泥棒は懲り懲りで
す。今度出できたらマトモに働き御挨拶に参
じますでござります。へエー

「まさ、お前その言葉忘れるなよ」

お巡りさんの一人が祖母の前にやつてきて、
「御隠居さんは相変わらずお達者で結構
でござりますなあ。一度我々にもその毛利家
の武道というものを教えて貰い度いもんですな
あ」

「何をお云いやす、埒らちもない泥棒じやから簡
単に済んだだけの事で、貴方達専門の方々に
お教えできるようなんではありませんよ」

余り解らない大人の言葉に退屈して、私は
お光のお婆あにトイレに連れてもらい、すぐ
又寝て了つた。

お婆様はそれから四五日も家に逗留され、
私は今様という昔の唄を幾度も祖母に習つ
たり、お婆様の子供時代の毛利家の御殿の
話など聞いて感心したり、大変だったのだな
あと驚いたりして、毎日朝が待たれるような
日を過ごした。

沢山聞いたお話の中で今でも鮮明に耳に残り、昔がどんなに厳しい生活だったか、今の方がずっと楽だったと思つたことが、未だ忘れられずはつきり覚えている。二つほど今も心に残り続けるものを書いておこう。

祖母の家は毛利の次席家老というものであつたらしく、一番心に残ることは次の様な話。

或日、祖母が庭に面した小部屋でお習字をしていると、突然庭でバシッという鋭い音が聞こえ、思わず立ち上がり障子を明けてみると、寅次といわれていた中間の首がころりと庭の苔の上に転がり、父親が刀の抜身を右手に下げ「見るでない！」と怒声をあげたので祖母は驚き一散駆けて台所に行き、泣き乍ら母に縋りつくと、母親は優しく祖母の背を撫で「理助は打首にされたのであろう」といわれた。お婆様は打たれたのが理助か正衛門か見分ける暇もなく駆け込んだので、母親への返事は出来なかつたとの事である。後々の話であるが理助という中間は父の気に入りだつたが、幾度も金銭を誤魔化し、その上女中を手当り次第孕ませる悪党だつたので、祖母の父親の勘気に触れ、打ち首にされたとの事だつた。

何故稚い私がそんな話を知っているのか、

と人は不思議に思うだろうが、祖母がいきなりそのような荒っぽい話をする筈もなく、実は泥棒が入った日の翌日の夕方、私は祖母と二人でお風呂に入り、何時もやるよう濡れ手拭いの端をもつて、水を取る為に力一杯振り下ろしたその音が、祖母に幼いころの手打ちの音を思い出させた事を知り、私はもう二度と、手拭いの端をもつて水気を取ることは、止めようと決心したものだった。

実際その話は六つの子供には余りにも強烈すぎ、その中間は何をして打首にされたのか、長い間私の心にかかる話であった。大きくなつてからは昔の日本の武士階級は想像を絶する荒ッポイ生活をしていたのだとよく思つたものである。その時以来今に至るまで私は濡れた手拭い様の布の端を持つてしだくようなことは出来ないでいる。

翌日祖母は私達の家から何処かへお帰りになつた。

「お祖母様は何処へ行かれたの」
私は優しかつた祖母を思い出し、お光に尋ねる。

「へえ、嬢さんはご存知やおへんのやネ、此処からずっと西の方に、六条というとこがおま

してな、そこには本願寺さんという大きなお寺がおますのでつせ、嬢さんのお爺さんはその大きなお寺の偉い和尚さんやつたそうでつせ

「この東福寺より大きいの？」

「そりや嬢さん何倍もおますえ」

「へえ、そんな大きなお寺にお婆様お帰りになるの」

「滅相もない、御隠居様はそのお寺の近くのシモタヤで、お一人で住んどいやすといふことでつせ」

「シモタヤって何？」

「小じんまりした家いふことでつせ」

「だつたらお婆様お一人で淋しいのと違うの」

「そらお淋しうございますやろ、でもどうしても本願寺さんの傍から離れとうないというておいやしたでつせ」

「??」

お光の話は私の想像をかきたてるけれど、余りはつきり解らない。

「どうさん、今にもつと大きうおなりやしたら皆おわかりになりますさかい、もう一寸我慢おしやすや」

「はい」

私はあつさりあきらめて、お八ツを貰い近所にいる同年の男の子の家へ、遊びに出かけた。

入江のケンチャンは、恰度私のところへ遊びに来る途中でうまく会えたので、手を握り合って二人共ピヨンピヨン飛んでよろんでいたら、東福寺の本堂を再建している大工のよっちゃんが、

「あんた達綺麗な木の削つたもの一杯残してあるからあれ繋いでいろんな遊びが出来るよ、欲しいだけ持つて行き」

よつちやんにいわれ、二人で抱えられるだけの広い鉗屑を集め、家へ持つて行つた。

「まあまあ嬢さん、迎山そんなもんどうおしやす、火の傍へ持つてきてはあきまへんで」

「はい、わかつてる。私たちこれ体に巻いて縁側から飛び降りるの、そしたらファツとして天から飛んだみたいになるの」

「さいでおますか、小さい子達は何ででもお遊びやすのやなあ」

「僕一番縁側から飛び降りる」

ケンチャンが体中に一杯巻きつけて、

「さあ飛ぶよ」

といった。私も体に巻いてみたけれど、ガサガサしてとても飛降りなんて出来そうもない。

「私怖いからやーめた」

「何だ美チヤン、弱虫だナー」

「いいもん、怪我したらお祖母様心配されるから、ケンチヤン矢張りこれ工事場へ返しに行こう」

「ウン、だけどお婆様つて、美ちゃんちにそんな人いなかつたけどなー」

私たちがお喋りしている裡に何時の間にか、お婆様が縁側に出ておられて、

「そなたケンチヤンという名前かえ、私が芙チヤンの婆々様じや、これから幾度もここへ尋ねてくるから、よう覚えときなされよ」

「へー、でも僕ンチの婆チヤンと比べると言葉がおかしいな、婆チヤン遠いところから來たの？」

「そうじやの、余り遠くはない、ほんの近く、六条から来ましたのじや」

「お婆チヤンの言葉一寸おかしいよ」

「そうである。婆々様は山口という遠い所の生まれじやから、京言葉には余り馴染まんのじや」

「ヤーイ、この婆チヤン自分の事、婆々様いうてる僕とこの婆チヤン、自分の事あていうよー」

「そ、うかいの。日本も広いから、色んな言葉があるのじやよ。自分の事をわたくしといふかと思えば、京言葉のようになつてとも、田舎ではわしともいう。まあ言葉といふものは土地によつて、色々あるということも坊ちゃんも芙さんも覚えておきなされ、おわかりたか」

ケン坊は舌を出して、「おわかりたようだ」というのが私は何となく腹が立ち、

「ケン坊嫌い、もう遊ばないようだ。お婆様つてとても強くて、昨日の夜家へ来た泥棒なんかすぐペシヤンコになつて、お巡りさんに渡されたもーん」

するとケン坊は、一寸口惜しそうな目になつて、

「お婆さんつて何処でも強いようだ、僕とこのお婆さんでも大工の棟梁叱りつけてるよう」

「棟梁つて、芙チヤンわからへん」

「ヤーイ、芙チヤン僕と同じ年なのに、棟梁知らんのつて、芙チヤン余り賢くないよ」

私はとても腹が立ち、もう賢坊とは一生遊ばないでいようと心に決める。

「まあまあ嬢さんと賢坊、そんなどこで口

争いせんと、このお八ツ持つて仲ようおあがりやす。と、お光のお婆あが、小餅にうつすら醤油をつけ焼いたものと、餅を持ってきてくれた。所が今まで奥の間に座っていた祖母の姿が何時の間にか消えている。私は瞬間、体がゾクツとして、思わず大声で泣き出した。

「お兼のおばあ、お婆様が消えてしまわれたあ。おばあ探してきてえ」

私の声は子供と思えないほど、甲高く、台所では大変だつたらしい。というのは祖母が私に黙つて、六条へ帰るからと、台所に言い含めたらしいのを、敏感な私は察知できたので、祖母はもうこの家に居ないとと思うと、体の何処かが何となく軽くなつたように感じたのは、それなりに祖母の存在が重圧だったのだろう。その日は、母や姉や兄も女中達も、何となくホツとした雰囲気で、私は早くから母の傍で寝入つたとのことだった。

五、環境の変化 II 十四人家族

祖母が六条へ帰つてから、怖い者無しとなつた兄は、すっかり学校に行かなくなり、終

日近くの山とか、醍醐の山辺りまで遠征して、遊び暮らすようになった。

母が毎日泣かんばかりに学校へ行かせようと、自分と一緒に出かけるよう説得しても、兄は頑として、登校を拒否し続けるばかりで、母に隠れてすぐ裏山へ消えて了う。子供心にも母の心配が気になり、私も必死の思いで兄の姿を追い求め、裏山や東山連峰を、泣き乍らついて歩いた。流石に兄も私をほっておくことはせず、危ない所は手をひいたり、オンブしてくれたりで見放すことにはなかつた。私も少しずつ成長して、きっと兄には、学校へ行きたくない理由があると思うようになり、

「お兄ちゃん、どうして学校へ行けなくなつたの」

と、執拗に尋ねずにおられない。

母親が学校から帰ると、それとなく兄の姿を追い求め泪ぐむ姿が、私には耐えられなくなつていた。

「ね、お兄ちゃんどうして学校へ行かないの」

私は間がな隙がな同じことをいうもので、流石にうるさくなつたのか、

「どうして行かないのか、お前にだけ教えて

やるよ」

といつて話してくれた。それに依ると、兄は担任の先生に職員室へ行つて、名簿を持つてくるよういわれたのだが、どうしても先生ばかりのいる、その部屋へ行くのがイヤだったそうで「はい」と返事をしてそのまま家へ逃げ帰り、それ以来学校へ行けなくなつた、とのことだつた。

「でもお兄チャン、お母さん毎日泣いて、学校へ行こう」つていわれるのに、お母さん可哀そうだもん、そのショクインシツつて、何か恐ろしいところなお兄チャン、
「別に恐ろしくないけど、僕もう十日も休んでるし、絶対いけないヨ」

「でもお母さん、同じ学校へ行つておられるし、お兄チャン行かないとお母さん、校長先生つて怖い先生に叱られるのだつて、お姉さんいわれたよ」

「でも僕、職員室入れないよ。もう」

そういうわれると、五歳余りの私には、そのショクインシツという所が、逆とても恐ろしい所のよう思つて、余り兄をなじるのも気の毒だと思つて、それはそのまま気にならなくなつた。

それから五日ほど経つたある日、私と兄が秀坊ンチから家に帰ったら、又お婆様が座敷に坐つておられる。私は思わずギクッとして、突つ立つたまま、ポカーンとした。見たことのない大きな男の人が、祖母の前に坐りニツコリ笑顔になつて、

「芙美チャンダネ?」と言つた。

「ハイ、でも私小父さん知りません」

私はそういうなりお婆様の顔も見ず、その大きな男の人その後に廻り、頭や肩を両手で叩いた。

「これニ何という行儀の悪い。許しませんゾ」

という激しい祖母の叱責の声にもめげず、部屋を飛び出し、縁側に立つている兄の傍によると、思わず知らず大声になつて、

「イヤダーハ、お兄チャンあの小父さんイヤダーハ、お兄チャン山連れてつて、イヤダーハ」

私の甲高い声は家中に響き渡り、台所の婆あば等も慌てて駆けつけ、むづかる私を扱いかねていた。

泣くだけ泣き喚いた後は、多分又兄と一緒に通天橋を渡つて、何処かへいったのだろう。

今になつて思うと、それは私の体に流れる、実父の血の怒りであつたのかかもしれない様な、気がしている。

そこに座つっていたのは、後に私達の養父となる人だったから、何も知らなくて私に流れれる血が、母を取られると本能的に感知したのだろうと思うようになつたのは、それから七八年経つてからだつた。

三、それから後

母は登校拒否の兄の処遇に悩んだ揚げ句、祖母のすゝめもあり、再婚したのだろうと思う。

私が会うなり、頭や肩を力一杯何とも解らない意志のようなものにそそのかされて、叩きまくつた男の人達と、共同生活をするようになつたのは、それから一年程後のことだつた。

トラック三台に荷物や道具を積み込んで、京都市内からは少し離れた、畑や竹藪もあり、周囲には有名な寺院などもあちこちにある、閑散な場所に移つたのは、半年程後だつ

た。

勿論、義父となつた人には子供がいる訳だし、私達も三人姉兄妹だし、始めて会つた時私もやつと七歳となり、次の年には小学校へ行く年で、幾らかは大人たちの、苦慮もわかるようになつていた。

向こうには女姉妹が三人と、男子が一人で両方合わせると、男子二人女子五人となる上に、行く先のないうちの婆や達を合せて、十四人の大家族である。周囲に余り家のない、どちらかといえば少し辺鄙な田舎が、かえつて広々とした感じで、子供たちの遊ぶには好都合だつた。

向こうの家にはお母さんが亡くなつてお父さんだけ、こちらの家はお父さんが亡くなつてお母さんだけという欠落家族同志は、どちらも欠けた人が満たされて雰囲気としては、そうチグハグな感じはしなかつたのだろう。たゞ問題は、私だつたような気がする。私の脳裏はどうしても、ピンと髪の立派だつた父親の死顔が脳裏に残り、私に優しく接してくれる、義理の父に親しめない所があつたが、この義父は私が本を読むのが好きな子だ、と思つたらしく、次々と子供向きの本を買つてくれ

れた。同年の緑ちゃんという女の子は、只管母の傍にくついて、お母さんお母さんと寧日もなく、私は向うの上から二番目の“まあさん”という女学校へ通うお姉さんが大好きで、何でも教えて貰つて、もう兄とお話もしなくなつていた。兄も既に中学生となり登校拒否もなく、順調な暮しだつたと思う。時には近所の小母さん達が、寄合所帯だなど蔭口をいうこともあつたらしいが、我家の中は何時も、和気藹々としていた。

私達子供は大した抵抗もなく、義理の父や母をお父さん、お母さんと呼び合い、甘えたり時には叱られたりしながら、仲良く暮らしていった。

その裡、弟も二人生まれて遂に九人の子供と、二人の女中、両親と、時に私の祖母も訪れるので、多い時は私達に従いてきたお光のお婆、お兼の婆共々で、十五人の大家族の家となつたが、大家族なりの秩序が出来て、大人たちは勿論、子供達にも夫々の秩序が出来て、各々夫々に自分たちの暮らしを、快く過ごすようになつていたが、十五人も一諸に暮らすということは、十五通りの生き方がある

ということだが、私達子供には毎日に様々な変化があり、例えば私と同年の緑チャンがそれまで、どれ程一諸に学校に行くよう誘つても、「一人で行く」と母の袖に縋り、ベソかいていたのが、元気良く「美チヤン早く行こう」と誘うようになつたし、登校拒否の経験をもつていた兄は、中学生になつてから、すっかり快活になつたばかりか、中一から抜群の運動能力を發揮し始め、体育の先生から何時か何処かで開催されるだろうオリンピックに“我が校から”と思わせるようになつて、性格もすっかり快活となり、家中の人気者となつていた。

思い出に残る子供の頃の一番の楽しみは、お正月の間幾度も家中の子供達でやる、百人一首の歌留多会で小さい弟たちはさておき、私も緑ちゃんも一年生になると、二三枚のオハコという自分の好きな和歌を、兄や姉たちの持ち札でしつかり覚え、何処にあるか確認して、上の一句で何処へでも遠征して、ものに出来た時の嬉しさと得意さは今も忘れられない。年上の姉や兄たちが、私や緑ちゃんに譲つてくれているのも知らず、二人ともすっかり有頂天になつて、すっかり百人一首ツ子

になつて、読み手の父母にも誉められた。

七十年以上も昔のことなのに、目を閉じて思い出すと、その部屋の床の間の松竹梅等も、脳裏にしつかり映るようだ。

この盛大な大家族も、それから有為転変の数々があり、両親共々子供の成長に従い、又元通りに戻り、時世流れて七十年弱、生き残るものわずか三名、母方は私一人、父方は二人、一人は今や死の淵とか仄聞、げに人生とは斯の如く、僥きものにてありつるか。

(おわり)